戯曲 風のクロニクル

桐山襲

戯曲 風のクロニクル

一九八五年一〇月三〇日 初版第一刷印刷
一九八五年一一月一七日 初版第一刷発行

著　者　桐山　襲
発行者　小島　光
発行所　株式会社　冬芽社
東京都千代田区九段北四―三―二〇―三〇三
電話〇三―二六二―六一一〇
振替口座（東京）一―八六六五七
印　刷　中央印刷株式会社
製　本　松岳社青木製本所
装　幀　山下篤則
装　画　渕上昭廣

© K. Kiriyama, 1985. Published by Toga-sha. Printed in Japan.
ISBN 4-924747-01-7

桐山　襲（きりやま　かさね）
一九四九年、東京に生まれる。主要作品『バルチザン伝説』作品社、『風のクロニクル』河出書房新社、「スターバト・マーテル」「旅芸人」

戯曲

風のクロニクル

山襲

小説「風のクロニクル」を原作としつつ
しかし　全く異なった作品として――

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongb

目次

戯曲　風のクロニクル――11
初演　スタッフ・キャスト――116
福田善之・桐山襲　往復書簡――117
あとがき――140

装　装
装　画　山下篤則
　　渕上昭廣　　帆

戯曲　風のクロニクル

桐山　襲

登場人物

男　（三十代後半）
女　（同）
杉村　（十八歳・十九歳・二十歳）
夏川　（十八歳・十九歳・二十歳・二十五歳）
橘素子　（十八歳・十九歳・二十歳）
岡田　（十八歳・十九歳・二十歳・三十代後半）
先輩A　（二十代）
先輩B　（同）
ママ　（四十代）
乞食
定食の学生

ギターを弾く学生
楠　（夏川と同一）
その妻　（橘と同一）
岡田の妻　（三十代）
村人たち
学生たち
若者たち

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongb

＜プロローグ＞

荒寥たる、実に荒寥たる風の音。
はるか遠く高い場所に、一人の男の影。
膝をついて、両手で土を盛り上げている所作。
小さな墓をつくっているのであろうか、或いは――
消える。

〝きょしこの夜〟が静かに流れている。
暗い場所。
突然、きわめて暴力的な何ごとかが起こる。
……若い男と女が、二つの黒い物体のように、倒れた――

闇。

〃きよしこの夜〃は続いている。

哄笑のクレッシェンドと共に、ゆっくりと、喫茶店〃プレゼント〃が浮き上がる。
若者たちが、奇怪なオブジェを造って騒いでいる。グロテスクな照明。
騒ぎが昂まり、それが急に途切れると、突如〈鳥のような叫び声〉と共に、一人の男が卒倒して——
闇となった世界の中に、スピーカーを通した〈鳥のような叫び声〉が被さり、長く尾を曳きながら消えていく。

(以上の三つの場面は、象徴的に、それぞれ断絶して、きわめて手短に、映し出されなければならない)

〈1〉

風の音が聴こえる。

風の音――そう、或るときは激しく、或るときは不気味に、また或るときは革命の唄を孕ませた風の音こそが、この芝居を貫いているものでなければならない。いま聴こえている遠い風の声にみちびかれるようにして、幾つもの時代が、幾つもの時代の夢と屍が、この舞台の上に現れて来るであろう。

さて、いま目の前に在るのは、霧に閉ざされた昏い世界である。それは冬の街路のようでもあり、遠い時間の中に浮んでいる廃墟のようでもある。もしかすると森の中の陰鬱な場所であるのかも知れないし、或いはまた、一人の人間の内部の、荒寥たる風景であるのかも知れない……

背後には、建物らしきものが半ば闇に溶けながら存在しているが、それは深

い海の底に眠っている船の残骸のようでさえある。

闇と霧の中に、スピーカーを通した「女」の声が聴こえる。

首都の街区に、もう幾度目か分からなくなった冬が来ている。街路のプラタナスは、葉を散らせ尽して、既に久しい。かつて夜の中でゆらめいていた十字路に立てば、炎は地下深く埋葬され、その上を窓のない車が通り過ぎるばかりだ。

「男」が、霧の奥からゆっくりと現れてくる。木のオルゴールの箱をかかえて、古いコートを纏って——。

（その身形（みなり）は、襤褸（らんる）というほどではないにしても、華やかなこの時代の中では、やはり少々異形であろう——）

男　……炎は地下深く埋葬され、その上を窓のない車が通り過ぎるばかりだ。……（ようやく姿を浮き上がらせて）Nよ、——きみが倒れたのはいまからちょうど十年前、一九七〇年代の中間の年のことだった。今夜と同じクリスマス・イヴ。凍りつ

いた街角、暗い街灯、血の匂い……。きみは頭に受けた打撃によって言葉を失ない、同時に両脚の自由を奪われた。言葉も、そして脚も、回復は不可能であろうと医者は宣告した。それからしばらくして、きみは惨憺たる姿のまま、故郷の村へ帰って行った。母親に車椅子を押されながら、何ひとつ喋ることなく、まるで一個の石のように、きみは故郷へ帰って行った。……いまからちょうど十年前、今夜と同じクリスマス・イヴ、たしかにひとつの幕が下ろされたんだ。

オルゴールの蓋を開き、誰にも聴こえない音に耳を傾ける。

すると、舞台裏の闇の中から、「女」がすうっと現れて——

女　（男の背中へ、低く）あの人のことを、考えていたのね。——クリスマス・イヴ——あの人が倒されて、いちばん最初に病院へ駆けつけたのは、あなただった。そして十年間、あなたはずっと、あの人のことを考え続けている……

こんなふうに「男」と「女」が登場しているのであるが、ちょっと付け加えておけば、これは変なのである。——変なのである、というのは、後になる

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongb